

「芭蕉の想い」付加  
先日作った「おくのほそ道」の学習プリントの裏に記した「芭蕉の想い」に「古人」宗祇についてを追記したものです。

芭蕉の想い

「おくのほそ道」は中学国語の集大成である。紀行文ではあるが、そのような文学ジャンルには収まりきらないものと言えらる。「芭蕉」ならば、彼に影響を与えた人とは、古人(李白・杜甫・西行・宗祇)である。しかし、この四人だけではないのである。西行で言ふならば、西行が何を思い旅をしていたのかという本質に迫りたかつた気がしてならない。どんな状況下で何を案じ、何をしようとしていたのか、古人の時代の中における様態と同一化したのか、古人の時代の中における底が垣間見ると信じられたのか。同化できれば思いの底が垣間見ると信じられたのか。西行は二度陸奥への旅を志した。一回目の理由は定かにはされていないが、西行が師と仰ぐ能因法師の足跡をもつて境地を知りたかつたのではないか。このように「古人」がさらなる「古人」の境地を知ろうとする繋がりが見てとれる。西行二回目の陸奥への旅は名目上君らも行く予定であった奈良東大寺焼失に伴う勸進であったとされる。途中鎌倉で源頼朝と面会したのは、旅の目的を伝え、平泉巡行の許可を得るためとされる。西行と奥州藤原氏は祖先に鎌足公を持つもの、いわゆる親戚である。それを知っているうえで頼朝は許可したのである。

鎌倉(中央)が奥州(藤原氏)に脱みをきかせる構図。そのはざままで隠密のごとく平泉へ向かう元武士西行。

芭蕉がおくのほそ道の旅に出た一六八九年に照らすと、「東照宮元祿の大修理の命が伊達藩に命じられた」と頃と考えられ、江戸(中央)が伊達藩(仙台藩)に脱みをきかせる構図となり、西行の奥州行の頃と符合する。

おそらく芭蕉は敬慕(尊敬)する師である西行の心境に少しでも近づかんとしたのであろう。「おくのほそ道」の旅は、西行巡礼の旅であった

と言える。

では、なぜ芭蕉は平泉の後、北陸(日本海)を通るルートをとつたのか。芭蕉は、義経を案じていたであろう藤原秀衡を訪ねた西行の動向とも重なり、源義経が平泉へ逃げ入ったルートを模索する意味で(源義経が平泉に入ったルートは明らか(にされていない)、その候補の一つ、義経記や歌舞伎の演目「勸進帳」にある北陸路を逆走するルート)を探つたのではなからうか。芭蕉自身も義経や弁慶に対する想いを強く持っていたのだらう。「繋ぐもの」は「勸進」という名目。山伏に化けて東大寺勸進の旅であるとして難関突破を図つた「勸進帳」。東大寺への寄進(勸進)として、黄金の国ジバングと世界に轟かせることとなる平泉に赴く西行。御恩と奉公のはざままで苦しむ伊達藩を気づかっているかの芭蕉。

白河の関は、藤原秀衡が自分たちの勢力の及ぶ目安であり、なんとか義経一行がそこを越え逃げ延びてさえくれればと願つた地点でもあろう。「時の旅人」と言えるものは、李白、西行。「時間」という概念を詩に盛り込み、古人の想いに寄り添つた。芭蕉もしかりである。

「おくのほそ道」冒頭は、時の中に留まる「自分の家」芭蕉庵を旅立たせる門出の段であったと言えらる。庵の柱に掛けた面八句には、「草の戸も…」の発句一句のみが記されており(俳諧連歌の師、宗祇をたてたものと思われる)、その続きは、庵が新たな住人とともに新たな人生を紡いでいってほしい(連句として書き綴つていってほしい)と願つた庵の門出の段なのだ。

「おくのほそ道」「平泉」のところで、芭蕉が思い浮かべる「国破れて…」という杜甫の詩「春望」の一節。この無常観のルーツとあいまつて、芭蕉の芸術(蕉風)的境地と共鳴したのであろう。

事実と虚偽は区別しなくてはならぬだろうが、わからぬところは、想像を駆使し、想像を確かめるべく、感じ取るべく動いた古人がいたとしてもおかしくはないだろう。その一人が芭蕉なのである。  
2021.9.1

追記「古人」宗祇について

「古人」と呼ばれる四人の芭蕉の敬慕する詩人歌人の中で、中学の学習の中「現れてこない」「宗祇」が、どんな点から芭蕉が敬慕する人物と言えらるか、生徒たちの中には疑問に思う者もいるだろう。

「宗祇」については、和歌山県有田郡有田町のホームページに紹介されている。(有田川町のホームページ) <https://www.town.ardagawa.lg.jp/top/kakuka/kanaya/7/2/1/578.html>より抜粋

「心の連歌師」宗祇法師 定輪寺蔵  
宗祇は西行、松尾芭蕉と並んで放浪三代詩人と呼ばれるとともに、連歌を大成し、幅広く世に広めた連歌界の巨匠です。

宗祇法師は応永8年(1421)、紀伊国藤波荘(有田川町下津野)で生まれたと言われています。幼少期については明らかではありませんが、やがて京都に上り、本格的に連歌に取り組みようになりました。そして、代表作である「三無瀬三吟百韻」(みなせさんぎんひやくいん)をほしめ、文化価値の高い作品を次々と発表しました。

当時の連歌が単にことは遊びのおもしろ味を競い、賭博を伴つたものであったのに対し、宗祇は格調高い文学性と芸術性の高いものへと変化させていきました。

やがて彼の名は全国に広がり、時の將軍足利義尚から連歌師としては最高の役職である「連歌会所奉行」を、朝廷(後土御門天皇)からは「花の下」(はなのもと)という最高の称号を与えられ、連歌師最高の位にまで達しました。漂泊の詩人とも呼ばれた宗祇は、諸国をめぐつて連歌の普及にも尽力しましたが、旅の途中に箱根湯本の早雲寺で82年にわたる生涯を終えました。その亡骸は弟子たちによつて宗祇の愛した富士山に近い裾野の地の定輪寺に葬られました。

右記の下線の部分が、芭蕉の想いと交錯し、呼応するところだと思えます。

能因のつた、永延二年(88年)、永承五年(1056年)あるいは康平元年(1068年)は平安時代中期の僧侶、歌人、初め文章生に補われて肥後進士と号したが、長和二年(1013年)十一歳出家した。一略「甲斐國で陸奥國までを旅し、多くの和歌作品を残した。(Wikipedia)より抜粋  
(おもな歌)  
あし吹くみきおももちは 菟田の川の錦なりけり 一小倉百人一首  
都を離れて立ち去る柳かな おくのほそ道 菅野

能因は白河に旅してながながと旅出たと偽って作られた歌とされる。  
西行(きぎょう) 元永元年(1188年) 文治六年二月十六日(1190年)三月十三日(1191年) 平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての日本の武士・北朝武士であったが、出家した。僧侶、和歌の余興の言傍の遺稿も発せり。遺稿や講義を主としていた俳諧を、権能と呼ばれる芸術性の極めて高い句風として確立し、後世は俳諧として世界的にも知られる。日本史上最高の俳諧師の一人である。但し芭蕉自身は発句俳句より俳諧連句を好んだ。(Wikipedia)より抜粋  
(おもな歌)  
嗚呼と目やほもの思はるるかち 頼るわが涙かな 一小倉百人一首  
湧辺に清水流る柳陰ははじとそそぎをまじりて 新古今和歌集

この歌の場所は遊行柳とて歌枕となしている菅野、白河の関の手前である。  
松尾芭蕉(まろ)おぼはせう、寛永二年(1624年) 一、元禄七年十月十三日(1690年)十一月二日(江戸時代前期の俳諧師、伊藤園田狂言師、現存の三重野舟出舟、芭蕉、和歌の余興の言傍の遺稿も発せり。遺稿や講義を主としていた俳諧を、権能と呼ばれる芸術性の極めて高い句風として確立し、後世は俳諧として世界的にも知られる。日本史上最高の俳諧師の一人である。但し芭蕉自身は発句俳句より俳諧連句を好んだ。(Wikipedia)より抜粋  
(おもな歌)  
田一枚種を立ち去る柳かな おくのほそ道 菅野  
関がやがてみ入るの声 おくのほそ道 立石  
五百両をちめて早し最上川 おくのほそ道 最上川

源義経について  
平家物語 二年次巻 菅原朝実  
義経記 源義経の生涯を中心とした作者不明の軍記物語全八巻。  
南北動時代から室町時代初期に成立したと考えられる。能や歌舞伎、人形浄瑠璃など、後世の多くの文学作品に影響を与え、今日、義経とその周辺の人物のイメージの多くは、義経記に準拠している。「如意の渡」「現富山県高岡市の話が有名。ただし英雄伝説の虚構も多いといわれている。」  
勸進帳 如秀波しの出家を基軸にした時清(清原)宗室を石創られた歌舞伎の演目(歌舞伎役者八景)一つ。勸進帳は「如意の渡」の舞の加賀國守の関現 石川小松市に愛蔵されている。

勸進とは  
人に勧めて仏道に入らせ、善根功德を積ませること。勧化ともいう。たとえば念仏を勧めることを念仏勧進という。転じて、善根を積ませる意味で、寺院を建立・修繕する際、信者、有志者に説き勧めて費用を奉納させることを勧進意味した。  
コトバンク「日本大百科全書(ニッポコ)からの抜粋



2021.9.10 追記

無常観の下地にあつてほのかににおいたつ美の世界を夢見たのでしよう。  
「草の戸」= 川のほとりのあはれ家  
「夏草」= 雑草  
「夏」= きよひびきを夢見た秀衡や義経とその従  
「舞」= きよひびきを夢見た秀衡や義経とその従  
「舞の家」= きよひびきに生まれ変わった家  
「浮立つ前向き」= 寓・偶 想像

「かすれた浜の美・実・現」  
「夏草」= 雑草  
「草の戸」= 川のほとりのあはれ家  
「夏」= きよひびきを夢見た秀衡や義経とその従  
「舞」= きよひびきを夢見た秀衡や義経とその従  
「舞の家」= きよひびきに生まれ変わった家  
「浮立つ前向き」= 寓・偶 想像

宗祇が生きた15世紀(1400年代)室町時代(芭蕉が生きた17世紀)(1600年代)江戸時代(元祿)から見ると、200年以上前の先生となります。格調高く芸術性の高い連歌を確立した宗祇。芭蕉が生きた時代では、俳諧というものが、また滑稽味を重んじる低俗なものも当り前となつていたのでしよう。芭蕉は宗祇先生より多く、俳諧を整合性たるとまもりもあり情緒もあるものへと返すべく尽力したのだと思えます。これのちの芭蕉の理念蕉風へとつながるものです。正統な俳諧理念の在り方を模索したところが、芭蕉が宗祇を敬慕した理由と言えらるでしょう。  
そんな宗祇師に敬意を表し、俳諧連歌(連句)百韻の型に倣い、「面八句」を柱に掛けたのです。しかし、「面八句」と言いつながら、実際に芭蕉が記したのは、「発句」(草の戸も…)のみだつたと考えられます。「面八句」が残っていないと「どれだけの人が集まった(俳諧の会だ)と思つているのでしようか」か記録がない」ということでうやむやにされたのかも知れませんが、「発句」一句のみが書かれていたと断言します。多くの人の手を経てゆく俳諧連歌。その(発句の)続きは新たな住人と庵とで、共に紡いでいってほしいという庵の新たな旅立ちを願つたことと考えれば結ぶべきでしょう。このことから、「おくのほそ道」冒頭の部分は、「庵の旅立ち(門出)」の段だと思えるのです。

我が国の美意識を考えた時、「ものあはれ」がまずあげられるかと思えます。「しみじみとした趣がある」などと訳されるものです。平安時代後期になると仏教の「諸行無常」が「末法思想」と世の中の荒廃ぶりと交錯していったのでしよう。一般的にいう「無常観」です。平家物語の「扇の的」(見えては「二十はかりなる男」を射貫いた時の「余興の余韻が興覚めとなる空気の变化」という「無常」。また「情けなし(こころなし)」「と源氏方の武士の反応にも見られた「無情」。